

人格の同一性に対するマツキンタイアの物語論的アプローチについて

石 毛 弓

はじめに

人格の同一性という概念は、とくに近代以降において哲学の諸問題の一つとして議論されてきた。さてこの問題に対して、ここ四半世紀あまりのあいだ物語論的に考察をするという手法が台頭してきた。しばしば自己の行為への説明責任を問うこの試みは、たとえばマツキンタイアやP・リクル、C・テイラーなどの著作にみることができ、本論はこういった物語論的アプローチによる人格の同一性の問題をマツキンタイアの論を中心として考察するものであり、『美德なき時代』を主なテキストとする。最初にマツキンタイアの人格の同一性の議論に深くかわる共同体と善の概念をとりあげ、次に物語と人生の連関に

ついて述べる。そのうえで人格の同一性に対するマツキンタイアの物語論的アプローチを解説し、最後にこのアプローチの限界を考察する。

一 マツキンタイアにおける善と共同体の関係

マツキンタイアにおける人格の同一性の議論は、共同体と善の関係と密接に結びついている。マツキンタイアは、現代は道德に関する言説が大きな混乱に陥っている時代だと指摘する。哲学者たちは道德上の言説の不一致に合理的な決着をつけようとしてきたが、結局すべての道德判断は態度や感情の表現にほかならないとする情緒主義に陥っている。その理由は、道德上

の言説が元来の歴史的な脈を離れたやり方で使用されているからである。もともと道徳に関する言説は、その道徳が属する文化の伝統に即してとりあつかわれていた。しかしながら現在の私たちはそれら多様な文脈を離れて道徳を理解しており、だからこそ道徳に関する言説は無秩序の様相を呈するようになったのだ。⁽¹⁾ マッキンタイアはこう訴え、さらに上述のような状況は主として啓蒙主義によって引き起こされた主張する。

啓蒙主義は道徳を合理的に説明しようとする。カントは理性を道徳の一般原則とし、キルケゴールは選択という行為に倫理の基礎を見出そうとした。デイドロやヒュームは欲望と情念を道徳の基礎とした。⁽²⁾ これらそれぞれの立場は両立するものではなく、したがって道徳に関する諸言説を合理的に正当化するという啓蒙主義の試みは失敗せざるをえない。残るのは、すべての道徳的判断は好みの問題だとする情緒主義となる。これがマッキンタイアが描くところの近代以降の道徳をめぐる略図である。⁽³⁾ したがって、いま徳の倫理学を復権させるのであれば、道徳上の言説が一貫して意味をなすところをつくりあげるべきであり、それはマッキンタイアによればアリストテレスの徳を復活させることなのである。

あらゆる技術、研究、行為、選択は、すべてみななんらかの善をめざしている。したがって、「善とはあらゆるものが目指すもの」⁽⁴⁾である。アリストテレスの「ニコマコス倫理学」は、このような文言から始まる。同書でアリストテレスは、人間の

生においては「徳に基づく活動こそが幸福の決め手」であり、「完全な善に基づいて活動し、しかも外的な善を時おりにはなく、全生涯にわたって十分に兼ね備えている人を、幸福な人」⁽⁵⁾と呼ぶという。ここで想定されているタイプの人間は、なにか重大な事件が起こるたびに人生が不幸になったり幸福になったりするわけではない。たとえ度重なる大きな不運に見舞われたとしても、けっしてはじめにはならず、時間をかけて幸福を回復するのである。アリストテレスにおいては、善とは人間の生において目指されるべきものであり、しかも人生のある一部分ではなくすべてにわたって目指されるべきものなのである。このとき人生は、善という目的において統一されたものとみなされる。⁽⁶⁾ アリストテレスのこのようななかたちでの善について、マッキンタイアは「ニコマコス倫理学」は、「どのような人生の形式と様式が幸福のために必要であるか」を私たちに示しているのだと考える。⁽⁷⁾

善の達成には諸徳の実践が必要である。そしてこの実践を担うものである個人の人生は、善という目的 (telos) の下に統一したものであるべきだとされる。マッキンタイアは、もし人生の目的が各ステージにおいてバラバラであるなら、アリストテレス的な善を遂行することにならないとする。彼は、しかし近代化とは人生を分割し個別のステージにバラバラな目的を課することであると批判し、「ある人物の人生における徳の統一性は、統一性をそなえた人生の特徴としてのみ理解できるので

ある。そしてそのような人生は、全体として描かれ評価されることのできる人生なのである⁽⁸⁾と述べる。さらに、このように想定された人生は物語的な理解をされる。この物語は善を目的とするため、それが属する共同体における道德的問題にかかわるものとなる。つまりマッキンタイアは、人格の同一性という問題に価値判断の概念をもちこんだということができらるだろう。ここで次に人生と物語のかかわりについて、行為と意図という側面からマッキンタイアの論をみてゆこう。

二 行為と意図、そして物語

ある人物の行為について、客観的にはいくとおりかの正しい特徴づけをすることができるときがある。たとえば庭でなにかをしている男性は、「穴を掘っている」、「庭仕事をしている」、「妻を喜ばせている」など複数のしかたで表すことができる。それではこれらの解釈は等しく妥当かといえば、マッキンタイアはそうではないとする。男性の行為は、行為者にとつての主要な意図に基づいて解釈されるべきであり、その主要な意図を軸として他の意図は関連づけられるのである。したがって主要な意図が「庭仕事をしている」場合と「妻を喜ばせている」場合では、その行為は異なる理解と説明をあたえられる。また「庭仕事」や「妻」といった単語は、その人物が属する共同体の文化的背景を前提としていふとする。さらに、ある意図が短

期的な内容と長期的な内容を含んでいる場合、短期的な意図はより長期的な意図の文脈にしたがつて解釈されるのである⁽⁹⁾。

ある人物のある意図は、他の意図との関係という因果的また時間的な理解でもって位置づけられる。また、これらの意図が属する共同体の文脈によって特徴づけられもする。このように理解された人間は、個人としては人生の文脈という意味から、また共同体とのかかわりにおいてはその伝統の文脈という意味から、一つの歴史的な物語を記すことに関与しているのである。マッキンタイアが「私たちはみな人生において物語を生きており、物語を生きたることによって自分自身の人生を理解しているからこそ、物語の形式は他者の行為を理解するのにおさわしいのである⁽¹⁰⁾」というとき、物語という形式は人間の行為を意味づける基盤として用いられている⁽¹¹⁾。このようにたがいのドラマを影響し合い制約し合つて、人生の物語は織りなされると考えられている。

さて物語の形式で人生を解釈するさいに、物語とは生きられるまえから存在しているのか、それとも生きたあとで語られるのかという疑問が生じるかもしれない。マッキンタイアの答えは明確であり、「物語は、歌い手や書き手によって押しつけられるまで物語的秩序をもたなかった出来事を、詩人や脚本家、小説家らがよく考えた末にもたらした成果ではない」としている。生きられた後、すべてが終わった後から行為に意味づけがなされるとすれば、死を迎えるまで私たちの生は意味をなさな

い挿話のよせあつめでしかない。しかし、「ある誰かがしていることをうまい具合に同定し理解しているとき、私たちは常に特定のエピソードを、ひとそろいの歴史的な物語の文脈に位置づけている」⁽¹²⁾のである。既存の物語類型にある程度即するかたちで、私たちは行為の意味や意図を理解する。たとえばのようなふるまいが善もしくは悪と受け取られるのかは、すべてではないにせよ、その共同体における道德の觀念にすでに影響を受けているのである。これが、L・O・ミンクやサルトルを批判しながらマッキンタイアが示す物語と人生の關係である。

人生の物語とは誕生から死まで一貫した目的をもつものであり、あらゆる経験は人生という文脈またその個人が属する共同体の伝統という文脈において解釈され、意味をあたえられる。言い換えれば、諸経験は人生の物語の文脈に調和するかたちで挿入されるのである。マッキンタイアは、物語という形式と個人の人生の關連をこのように解釈する⁽¹³⁾。

三 物語と人格の同一性

伝統的な人格の同一性の議論では、ある人格が異なる時間において同一であるとみなされるための論理的な必要充分条件が問われ、そこではしばしば身体的あるいは精神的な継続の規準が問題にされる⁽¹⁴⁾。しかしマッキンタイアはそういった人格の同一性にまつわる代表的な問題提起に対して、自分が掲げる概念

はそれらにくみしないという⁽¹⁵⁾。人格の同一性をめぐる諸議論に欠けているのは、物語とその物語において要求される登場人物としての統一性であり、これこそがマッキンタイアにとっては時間を通じた人格の同一性を担保するものなのである。この点を理解するために、一つの例を用いよう。

一八一五年 将来有望な船乗りの青年が自分の婚約披露パーティーにいる

一八二二年 監獄の囚人は絶望し餓死寸前の状態である

一八二九年 司祭が宿屋主人に宝石をわたす

一八三八年 鋭い眼光と青白い顔の男性がパリに豪華な新居をかまえる

これらの記述は、単独に語られるだけではたがいに關連のない雑多な情報としかとらえることができない。しかし「モンテ・クリスト伯」という物語の構成要素としての位置をあたえられたとき、各エピソードは一つの主体の下における統一性をもつ。囚人三四号はなぜ自分が快活な船乗りエドモン・ダンテスとこれほどまでにかけ離れてしまったのかを他者に説明することができ、パリ社交界の注目の的であるモンテ・クリスト伯はなぜブゾーニ司祭という変装をして宿屋の主人にダイアモンドをやったのかを説明することができる。このように、異なる時間において人格が同一であるということは、人生におけるエピソード群を、自己のものとして統一された物語観の下で語ることが

できることと等しいとみなされるのである。

マッキンタイアは、人格の同一性に関連するものとして「物語 (narrative)」「理解可能性 (intelligibility)」「説明責任 (accountability)」の三つのキーワードを挙げる。「物語」についてはこれまでみてきたとおりである。次に、この物語は諸徳の実践という目的をもつとされるから、物語の主体はその目的に向かう運動として自己の行為の意味や意義を理解することが可能だとされる。さらにその主体は、自分の物語について他者にその意味や意義を説明することができる。物語の主体であるということとは、その物語全体や各エピソードについての他者からの「なぜ」に対して「なぜなら」と答えることができ、行為における「だれが」との問いに「自分が」と責任を負うことができるということなのだ。加えてこの主体は、他者におなじように問いかけ、答えを期待することができる。このようにマッキンタイアは、身体的継続性や心理的継続性ではなく、主体が人生の物語を一貫したかたちで語りうることを人格の同一性を保証するものとした。⁽¹⁷⁾

ここまで、マッキンタイアによる人格の同一性への物語論的アプローチの概要を述べてきた。人生は支離滅裂な行為のごった煮なのではなく、諸徳の実践という文脈のもとに関連づけられた物語として理解される。そして主体によるエピソードの関連づけがなされるかぎり、その主体が異なる時間においてどのような変容を被ろうとも、自己の物語の登場人物としての同

一性は保たれる。経験記憶の有無やその程度ではなく、行為に対する物語・理解可能性・説明責任が人格の同一性の軸とされているのである。戯曲家のベケットは登場人物たちに、人間は生きそして死んだというだけでは足りず、生きたということをしやべらなければ満足できないものだといわせた。⁽¹⁸⁾ 語ることでもって主体は人生の意味を理解すると考えるとき、人格の時間を通じた同一性を物語の形式に求めることは一定の妥当性をもつと考えられるだろう。しかし同時に、論者はこの理解ではとりこぼすものがあるのではないかという点を指摘したい。そこで残りの二章で、人格の同一性の議論に対する物語論的アプローチの限界について考察しよう。

四 物語論的アプローチの限界

人格の同一性は物語の形式によってつくられ、かつこの物語はそれが属する共同体の伝統に多くの部分を負うという考えをこれまでみてきた。本章では、しかし物語と共同体の伝統というこの枠組みでは包括しえないものがあるのではないかという点を検討する。この包括しえないものを、ここでは既知の物語の枠組みからは逃れてしまうような経験群であるとする。以下ではそのような経験の例を示し、まず人格の同一性に物語論的なアプローチを適用した場合にあつかいきれないものができる可能性を示唆したい。

共同体の伝統に即しては語ることでできない経験にはさまざまなタイプがあるだろうが、本論では、意図して諸徳に反したり離脱を試みるようなものはあつかわないこととする。ここでとりあげるのは、意図しているわけではないにもかかわらず共同体の内部では適切な言説を得ることができないような経験である。その例として、最初にW・ベンヤミンによる一文を挙げたい。一九三〇年代初期にベンヤミンは、口から口へと伝えられてゆく経験が長編物語の源泉であるとし、この経験の価値が下落していると指摘した。その一つの典型として、彼は第一次世界大戦の帰還兵たちを描写する。

戦争が終わったとき、私たちは気づかなかつただろうが、戦場から帰還してくる兵士らが押し黙つたままであることを？ 伝達可能な経験が豊かになつて、ではなく、それがいつそう乏しくなつて、彼らは帰つてきたのだ。……まだ鉄道馬車で学校に通つた世代が、いま放り出されて、雲以外には、そしてその雲の下……ちっぽけでもろい人間の身体以外には、何ひとつ変貌しなかつたものとしてない風景のなかに立つていた。⁽²⁰⁾

第一次世界大戦における技術の発展は、物理面だけでなく倫理面を含む内面世界までも急速に変容させた。共同体から引き離され、また戻された帰還兵たちは、もはや元の場所に留まつた者たちと経験を共有できなくなつてしまつた。ベンヤミンが

描き出すのはこのような状況である。この元兵士らは、好んで経験の共有を拒否するのではない。彼らはそれまでの経験が役に立たない場に放り込まれ、帰還した。そして以前の共同体の伝統では自分たちの経験を語る言説を見出すことができなかったのだと解釈しよう。⁽²¹⁾

もう一つ別の例を参照しよう。自伝的記憶の研究でC・R・パークレイは、心的外傷や残虐行為などの犠牲者は、ときに自己の物語に一貫性をもたせるための根幹的な要素を欠くことがあると主張する。彼は第二次世界大戦におけるホロコーストの犠牲者にインタビューし、しっかりと統一性をもって主観的な経験や自己の感覚を構築するさいの、物語的構造の限界を検証しようと試みた。⁽²²⁾パークレイは、心理的外傷を負つた人びとの話はしばしば一貫性を欠き、記憶の間違いやでつちあげを含むことがあるという。なぜなら被害者たちは、まとまつた物語の語り手であればそなえていると期待される時系列的・空間的、また因果的に組織された語りのための言説を往々にしてもたないからである。あるホロコーストの生存者は、「皆殺しを表す言葉はない」という。⁽²³⁾パークレイの例で焦点を当てたいのは、彼がいうところの既知の正統な物語形式 (known canonical narrative forms) によつて構成される統一のとれた物語には属さないタイプの語りの存在である。

さらにピーター・ゴールディは人格についての研究で、人は悲劇的なまたは心理的な外傷となるような記憶について、しば

しば感情的に適正な対応をとれないことがあると主張する。それは「自己に対する物語的感覚 (a narrative sense of self) を発達させ維持する能力」を、少なくともその特定の過去の出来事について欠いてしまうからである。彼によれば、そのような過去の出来事を、満足できる物語として自己と関連づけようと努力は失敗に終わる。なぜならそういった経験は、なにか起こったのかを物語るうえで正しいやり方や適正な視点をその主体に失わせてしまうからである。正統とされる物語形式による理解では、ペンヤミンの帰還兵やパークレイの犠牲者、ゴールデイが想定するような語りは妥当であるとはみなされないだろう。しかしこれら物語未満の語りを妥当とみなしえないところに、正統な物語形式の限界をみることができるのではないだろうか。

上述の例は、特異な経験をした者にのみ起こる病理的なものであるとして、人格の同一性への物語論的アプローチの議論から退けられるべきではない。それよりも、決して本人にとって重要でないわけでもないにもかかわらず、共同体の内部では語りえない経験というものがあるということへの示唆として読み解くべきだろう。このような語りは、沈黙したり、つかえたり、矛盾や偽証をはらんだりして、調和や統一とはかけ離れたものとなるかもしれない。しかし統一された人生という物語の筋には吸収されえないこのような語りの存在意義についても、私たちは考察をするべきであろう。

五 物語未満の語り

さて、第四章で示したような物語未満の語りをマッキンタイアの考えと照らし合わせた場合、なにかみえてくるだろう。これには二つの見方を示しえるだろう。一つは、人生の目的が無意味になったとき、人はもはや統一された物語を語るべきでなくなり、きなくなるという見解だ。またもう一つは、だからこそ共同体には善という目的が必要なのであり、経験が共有されえる場を再構築すべきなのだということである。一つめについてはマッキンタイア自身が、自殺を試みたり実行するような人びとが自分の人生が無意味になってしまったと不平を述べるとき、彼もしくは彼女はしばしば「人生の物語が自分自身にとって理解不可能となり、どんな意義も、また頂点や目的に向かう運動も欠いている」状態にあるのだとする。この見解は、直後に続く「誕生から死までを貫く物語の主体であるということとは……語られる人生を構成する行為や経験に説明責任を負うということである」と対のものとして読むことができるだろう。したがって人生の物語に混乱が生じ、諸経験に適切な文脈を与えられなくなった人びとは、マッキンタイアが想定する物語の主体から外れることになる。それは人格の同一性をかたちづけれない存在とみなされることと同意義である。この見解に対する議論は後回しにして、次に二つめの考えについてみてゆこう。

経験が共有されうる共同体の必要性は、「美德なき時代」におけるマッキンタイアの主張の核をなしている。この点を物語未満の語りという側面から再考してみたい。一番めの問題では、共同体の伝統的な物語形式に即さない語りは、主体における同一性の喪失を示すものとみなされる可能性がある点を指摘した。また二番めについては、物語的統一に還元されえない語りは、共同体の伝統の内部では適切に処理できないとした。つまりどちらの場合でも、統一性からはみでる経験は、共同体の伝統という枠組みではあつかわれえないものとなる。さらにこういった物語未満の語りを、先に挙げた物語・理解可能性・説明責任にあてはめてみよう。するとこの語りは、物語未満であり、語る者自身にとつてさえ理解不可能であり、他者に意味や意義を説明する責任を果たすことができないものであることが露呈する。したがってマッキンタイアの考えによれば、この語り手は時間を通じた主体としての同一性をもたないということになる。しかし論者は、共同体の伝統において語りえないということが人格の同一性をもたないという条件になりえるのかという疑問を抱くのである。あるエピソードを己のものとして同定しようとする語りが、一般的な見地からは失敗し物語を破たんさせていたとしても、まだとらえきれではないがそこで生じつつあるかもしれないものを含めたかたちでの人格が想定できるのである⁽²⁷⁾。

このような人格は、従来の人格の概念に適應するものとはな

らないだろう。近代における人格の同一性の議論の始まりとされるロックは、「その行為がなされたのは、いまそれを省察する現在の私とおなじ私によつてである」といえること、つまり意識が過去の行為や思想に到達できるかぎりがその人物の同一性をつくるとした⁽²⁸⁾。統一された主体として行為に責任をとることができる存在が、ここでは人格であるとされている。この見解は近代以降の西洋思想における人格の概念に脈々と受け継がれており、物語論的アプローチもその例外ではない。ある行為を人生の物語の一部として語るということは、誕生から死までを貫く物語の主体として己をとらえ、語られた経験を自己のものとして引き受けそれに責任をもつということだからである。他方、本章の目的は、正当な物語形式では語れない経験を含む存在であっても、つまり統一性にはころびが生じている場合でも、その語りを排除しないかたちでのあり方を探ることなのである。

いまここで描きだそうとしている人格のあり方は、抽象的に把握しにくいものに感じられるかもしれない。この観点は、たとえばマジヨリティ側からはないものとされる語りを対象とする研究としてのカルチュラル・スタディーズやポストコロニアリズム論と比したならイメージはしやすくなるのかもしれない。スチュアート・ホールらによる現代文化研究センターの設立は、既存のアカデミックの文脈では語りえないものを領域横断的にあつかうことをめざしたものである。文化的なものや権力の構

造に敏感であり続けようとするカルチュラル・スタディーズでは、権威の側からは正当に評価されていない対象に焦点が当てられる。また支配と被支配の関係を批判的に分析するポストコロニアル理論も、しばしばマイノリティによる語りを問題とする。スピヴァクは、サバルタンの女性について知識人が語りえるのかという問題を鋭く指摘した⁽²⁹⁾。このような研究は、たしかに本論で言及しようとしている方向性を示してはいる。ただ現時点では、物語未満の語りをこいういった研究とイコールで結ぶことは避けたい。近代的な人格概念への批判になりうるという点では多くの共通点をもつであろうが、上述の研究を適用するまえに、伝統の枠組みからはみえない語りとはどのようなものとなりえるのかを、より広い範囲から探求したいと考えるからである。この探求は、大きな意味でのポストモダン時代における人格と同一性のあり方を描き出す試みの一つであると位置づけることができるだろう。

誤解を避けるために述べるが、この批判は人格の同一性に対して物語論的アプローチはまったく無効であるということを意味してはいない。人びとが自分自身の行為や経験に対してなんらかの理解を求め意味を必要とするのは、先に引いたベケットの戯曲をもちだすまでもないことである。それこそがマッキンタイアが、人間は本質的に「物語る動物である」と称したゆえんでもある。しかしこの語りに、誕生から死までを貫く物語としての統一性を必ずあてはめることの妥当性をここでは問題に

しているのである。また、マッキンタイアの批判をすることが即りベラリズムや個人主義につながるわけではない点もあわせて述べておく。本論では、M・サンデルがロールズの論を指して「負荷なき自我 (unencumbered self)」と批判したような、共同体の影響を受けない純粋で近代的な個を想定しているわけではない。そのような個は、共同体の伝統という物語を排除する分、よりいっそう堅固に統一された自己の物語を必要とするだろう。⁽³²⁾

おわりに

人格の同一性の問題を物語論的に解釈するという試みについて、これまで考察してきた。時間を通じた同一性の必要十分条件を問うのではなく、たがいに意味をもつ一連のエピソードのまとまりとして人生をとらえるのが、この物語論的アプローチの特徴である。さらにマッキンタイアは、エピソード群が統制され意味をもつためには目的が必要であるとし、それは諸徳を通じて善の達成だとした。個人は過去をもつて生まれ、諸共同体の伝統という物語によって道德的感性を大きく特徴づけられる。しかしながらこの善という目的をもつた共同体が機能しなくなっているのが、マッキンタイアが批判するところの現代社会の特徴なのである。この事態を免れようとするならば、新たなかたちでの共同体を生み出す必要があるというのが、「美德

なき時代」を通じたマッキンタイアの主張となる。

本論の後半では、上述の物語論的アプローチでは包含できない存在について言及した。例として挙げたのは第一次世界大戦の帰還兵やホロコーストの犠牲者たちだが、対象はそれらに限られるのではない。共同体の伝統という枠組み内では整合性をもたせることができない、それでいて自己の同定にながしかかかわるかたちで語られようとする諸言説は、少なくとも無意味なものとしてすっかり排除されるべきではないだろう。共同体の正統な物語の内部では適切な言説をもたない語りを内包した存在の人格を考察することが、本論のめざすところである。この問題は、近代以降における人格概念への批判的分析という意味で、ポストモダン状況において人格の同一性がいかなる解釈をさるうるかを探る試みであるということができるだろう。

注

* 「美徳なき時代」からの引用は、MacIntyre, *Alasdair. After Virtue*. University of Notre Dame Press, Indiana, 1984 より行ふ A V と略す。なお訳出には次の書籍を参考にした。マラスデア・マッキンタイア「美徳なき時代」篠崎英訳、みすず書房、一九九三年。

(1) 現代の善をめぐる不安という問題意識は、テイラーの著作にもみられる。Charles Taylor, *The Ethics of Authenticity*, Harvard University Press, Cambridge, 1992.

(2) AV, pp. 46-47.

(3) マッキンタイアと啓蒙主義については次を参照。Jeffrey Stout, *Ethics after Babel: The Languages of Morals and Their Discontents*, Princeton University Press, New Jersey, 2001. Robert Wokler, 'Projecting the Enlightenment', *After MacIntyre: Critical Perspectives on the Work of Alasdair MacIntyre*, ed. John Horton, Susan Mendus, University of Notre Dame Press, Indiana, 1995.

(4) アリストテレス「ニコマコス倫理学」林一功訳、京都大学学術出版会、二〇〇二年、p. 4.

(5) *Ibid.*, pp. 42-44.

(6) 本論はアリストテレス自身における善の概念について議論するものではないため、マッキンタイアが解釈するところのアリストテレスにおける善の思想を中心に考察する。

(7) Alasdair MacIntyre, *A Short History of Ethics*, University of Notre Dame Press, Indiana, 1998, p. 38.

(8) AV, p. 205.

(9) *Ibid.*, pp. 206-208.

(10) *Ibid.*, p. 212.

(11) *Ibid.*, pp. 213-214.

(12) *Ibid.*, p. 211.

(13) マッキンタイアの物語論への擁護については次を参照。

Anthony Rudd, 'In Defence of Narrative', *European Journal of Philosophy*, Volume 17, Issue 1, 2009, pp. 60-75.

(14) Harold W Noonhan, *Personal Identity*, Routledge, London.

1989.

- (15) AV, p. 216.
- (16) これら三つの能力は人格の同一性を問う際にすでに想定されているのではないのかという問いについては、マッキンタイアはどちらがより根本的であるわけではないとする。これら三つの能力と人格の同一性の概念は相互前提 (mutual presupposition) であるとしようのがその主張である。Ibid. p. 218.
- (17) このいわば他者の声に応答する責任能力は、たとえばリクールにおいても考察されている点である。ホールリクール「物語と時間」Ⅲ 久米博訳、新曜社、一九九〇年。
- (18) Samuel Beckett. *Waiting for Godot: A Tragicomedy in Two Acts*. Grove Press: N.Y., 1994.
- (19) 本論とは異なる角度からではあるが、S・セイヤーズは共同体と人格の同一性の関係について、マッキンタイアの思想を踏まえて論じている。Sean Sayers. 'Identity and Community'. *Journal of Social Philosophy*: Volume 30, Issue 1, 1999, pp.147-160.
- (20) ウォルター・ベンヤミン「ベンヤミン・コレククション2 エッセイの思想」浅井健二郎編訳、三宅晶子・久保哲司・内村博信・西村龍一訳、筑摩書房、一九九六年、p. 285.
- (21) 技術や倫理面からみたヨーロッパでの第一次世界大戦の特殊性についてはたとえば以下を参照。桜井哲夫「戦争の世紀——第一次世界大戦と精神の危機」平凡社、一九九九年。
- (22) Craig R. Barclay. 'Autobiographical remembering Narrative constraints on objectified selves'. *Remembering*

our Past: Studies in Autobiographical Memory. Cambridge University Press: Cambridge, 1995, p. 97.

- (23) Ibid. p. 113. バークレイは「被害者以外の人間は被害者に主観的な視点をもたらす心理的外傷の世界に生きてはいないから、統一性を欠く物語の意味を理解しえないとする。さらに彼は「似たような心的外傷を経験した人びとは、そうではない人びとにとっては意味をなさないような仲間うちの言葉をつくりあげるかもしれないと述べている。」
- (24) Peter Goldie. *On Personality*, Routledge: N.Y., 2004, pp. 118-119.
- (25) AV, p. 217.
- (26) 似た見解としてテイラーを挙げる。Charles Taylor. *Sources of the self: the making of the modern identity*. Cambridge University Press: Cambridge, 1989, p. 47.
- (27) マッキンタイアは「人間の生の統一は物語的な探究の統一であるとし、この探求はときに失敗、挫折、放棄されることもあるとする。しかし本論で想定している伝統的な物語の枠組みに回収されない語りは、このような意味での失敗を示唆するものではない。マッキンタイアにおける物語的探求は共同体の歴史を背景とした善の概念に支えられ、この探求の失敗はそのような善を求める一貫した性向 (Disposition) をもちえなかったという点での失敗である。したがってこの失敗は、伝統と人生の統一と善という側面から「失敗の物語」として語りえるのであり、物語に回収されない語りであるという意味での失敗ではないと考えるからである。AV, p.

- 218-220.
- (28) John Locke. *An Essay Concerning Human Understanding*. P. H. Niddich ed. Oxford University Press: Oxford, 1975. pp. 180-181.
- (29) Gayatri Chakravorty Spivak. 'Can the Subaltern Speak?'. *Can the Subaltern Speak?: Reflections on the History of an Idea*. Rosalind Morris ed. Columbia University Press: N.Y., 2010.
- (30) AV. p. 216.
- (31) Michael J Sandel. 'The Procedural Republic and the Unencumbered Self'. *Political Theory*. Vol. 12. No. 1. 1984. pp. 81-96.
- (32) マッキンタイアが提唱する近代時自我への批判と「自己」た「自己」を参照。 Seiriol Morgan. 'Moral Philosophy, Moral Identity and Moral Cacophony: Unmasking MacIntyre's Metaphysics of the Self'. *Analyse und Kritik* 30. 1. 2008. pp. 157-175.

(いしげ ゆみ・大手前大学)